おまゝごと・動物園

――入園當時の誘導保育の主題――

東京市東郷幼稚園

よい誘導保育をすることは難しい。しかし難しいと思つて遠ざかつてしまふとなほ更手が出ず、おつくうになつてしまふ。せつかく子供等が、その遊びの中に、生活の中に、示してくれる主題をとらへて、大がゝりのものではなくとも度々誘導保育を試みたいと思つてゐる。かう書きながら私は自分のこゝにしるさうとしてゐる經驗が本當の誘導保育だと云ひ切ることが出來ない樣な氣もするし、度々の經驗で色々な疑問やら失敗やらをふやしてもゐる。

年少組、それも新保育期では子供等の遊びもまだ動きが少く、すべてにまだ力がないのだからあまり繼續的なことや複雜なプランは立てられない。一番ひくいところに標準を置いてどの子も遊べる樣に、どんな子供も一緒に出來る樣にと自由遊びの中からばかりではなしに設定保育の樣な形からこの誘導保育の形へ子供をつれて行くと云ふことも して見た。

四月なかば、雨の日、（二年保育三年保育の幼兒二十名）

二人程、前から在園の幼兒まゞごとのお皿をならべ「お食堂ごつこ」と稱するものをはじめてゐる。そこで、他の子供等を集めて、みんなで御馳走をこしらへることにする。キビカラ細工、キビカラを鋏で切りヒゴを通す仕事とキビカラを切り色紙で包むことゝ。これでおいしいお團子とキャンデーが出來上る。二三人が働き手となり他はお客樣、唯これだけでこの時は別にこれ以上發展はしないでしまつたが、大ぜいで、まとまつた遊びをすることのまだ出來なかつた子供らはこれでも滿足しどの子供もがよろこんでこの遊びの中に這入つてゐた樣であつた。

五月はじめ　ある晴れた日。

綱を用ひての電車ごつこ

雜草のある空地での遊び

前にしたことのあるキビカラの遊びと

砂場でのおだんごこしらひ。これらをまとめて、子供等の大好きなえんそく遊びをし樣と考へる。

雨上りの砂はよくにぎれたからこれを用意して置いた古葉書利用の經木代用品に包んでおべん當をこしらへた。勿論包めば、あはれはかないつぶれ方はしたのだけれど。これをハンカチーフにキビカラのキャンデーと一緒に包む。細引の電車に乘つて路ひとつへだてた空地へ出發。五十坪にも充たないこの空地には雜草のみどりがある。蝶がとび、小さな空色の花が咲き、タンポポさへ小さいながら白い綿毛をとばす。コンクリートの庭に比べて、なんと豐かなところか。子供らは大切な兵糧もなげすてる樣にして、あちらへ走りこちらへとび、小高いところへ上つては兩手をのばして歡聲をあげる。さて、おべん當ともなれば砂でもキビカラでも子供たちは集つた。お砂のおにぎりをふりまいたことゝ、キビカラのキャンデーを本當に口の中へ入れた子供があつたのには少し困つた。砂は大した量でもないからその空地へ寄附をした。おべん當のあと、紙の始末、それがこちらのみそでもある。こんなことでひとかど公德心の育ちへ助力したなどゝよい氣でゐたわけでもないが子供らは先生の言葉にすなほに從つて前からあつた紙までもきれいにし、石迄も片附けた。ブーン〳〵と爆音勇しく百パーセントの輸送能力を出した男の子も幾たりかあつてこの空地の清掃作業が出來てしまつた。小さな雜草を兎の餌にとつて歸る。

砂のおにぎりを包んだハンカチーフを洗ひたかつたがこれは出來ずにしまつた。

五月末日　曇り日

室内に椅子を並べての電車ごつこ。これから動物園ゆきに發展させ、動物園遊びをさせ樣ともくろむ。

電車の切符、動物の餌（おいも人　おせんべい）參の製作

動物の標本を戸棚から出して並べる

――サクや檻をこしらへる仕事――

これは相當によく發展しうまく行くだらうとはじめたのだつたけれど反對の結果に終つてしまつた。誰は車掌さんになつて、誰は動物園の餌を賣る人になつて、と先生が指圖をし、あゝし樣、かうし樣と先生の考へで子供を引つぱり過ぎた形であつた。こちらの計畫それも、この子供等に

しては複雜過ぎる組織へ子供は引つぱられた形となり、落ちついた「あそび」の氣分がつい少くなつたことに氣がついた頃、誰か切符をとつちやつたと一人が泣き出す。誰ちやんがライオンの檻をオサルのところへ持つて行つたと一人が怒る。何となく子供等の氣分が粗くなつてしまつた樣で案外樂しくなく終つてしまつた。先生も疲れたし子供もつかれた。これは誘導保育をし樣として强制保育をしてしまつたと、私はその日一日樂しくなかつた。四月のはじめ、遊動木を電車にして、さあ動物園へ行きませうと、まだお友達もなくてゐたりする子供を集めてした時の方が却つて面白かつた。子供自身がお猿になつてシャングルジムの上でキャッ〳〵やつたり木の葉を切符や餌にしたり、今度大積木やお庭の遊具を使つて面白い動物園遊びを計畫してゐるのだけれどとかくこちらが動き過ぎ子供等自身が動かされる結果にならぬ樣、ここに年少組では注意してうまくやり度いものと考へさせられてゐる。

とにかく、あまりこちらの考へでたくさんの計畫をし次次と繼續發展させ樣と望み過ぎては駄目である。手技を取り入れるにもあまりにそれが難しかつたりすると肝腎な處で面白さや意氣込がにげてしまつたりする。

（三八頁より）

し、はたの目にも羨しい程、生々とした喜びの生活になつて依る。その生活形式が全く意識に上らず、生活內容が子供達の生活核心となり、精神的內容が子供達を支配し、子供の生活は段々高められ深められて行く。この速度の早く、生活深究の程度の高まりは驚くべき早さで進められる。

その日の先生の御話を私達に得意になつて話してきかせる。習つた唱歌を歌つてきかせる。

「まだよく覺えないんだけれど……」

と、前置きして歌ふときなどは最も樂しさうである。今日は『斯々のお遊びをした』と一日の愉快さを語る。繪畫、手工等の製作品を持ち歸つて見せる。

「これはあんた描いたの……、本當かしら、仲々うまいね」

とからかひ乍ら褒められる。長女はニコニコしながら自作なること主張する。

「これは飛べるかな。隼號かな」

と、自作の紙飛行機を批評されると、自信ありげに

「飛べるさ　飛べるとも」

と、長男は自己の創作意圖を堅持する。

斯くして、環境全體、生活全體に自己を融合沒入し得て、周圍と自己との聯繫に人間的溫さが醸成される頃になればその喜びは益〻深まつてゆく。

長女「私の先生は○○先生」

長男「僕の先生は○○先生」

と、師の名をはつきりと固有名詞で呼ぶやうになり、その感化愛護を感じ、そこから湧く師への限りなき敬慕と絕大なる信賴を持つやうになる頃子供の歡喜は極頂に達する。

（昭和十八年四月四日）